

開会挨拶

佐藤真理子

(筑波大学 教育開発国際協力研究センター センター長)

本日はお忙しい中、文部科学省、国際協力機構、それから筑波大学主催の平成 22 年度青年海外協力隊派遣現職教員帰国報告会にご参加いただきまして、大変有難うございました。ただいま紹介に与かりました、筑波大学教育開発国際協力研究センターのセンター長、佐藤真理子でございます。

わたくしごとではありますけれども、私の研究テーマは、開発途上国に対する教育開発援助でございまして、これまで調査研究にインドネシア・フィリピン・バングラデシュ・エチオピア等、様々な国に行つてまいりました。それぞれの国に、現職派遣の先生方ではないんですけれども、青年海外協力隊の隊員の方々に会いまして、彼らが困難な生活環境・まったく異なる文化・異なる言語の中でたくましくボランティア活動を行っていることに大変感銘を受けてまいりました。

先進国の青年が途上国に行つてボランティア活動を行うという制度は、1960 年にアメリカでケネディ大統領が始めた「平和部隊」に遡ることが出来ます。この制度に範をとつて、ドイツ・フランス・イギリス・それからスウェーデンと、様々な先進国で実施され、多くの先進国の青年が途上国で活発にボランティア活動をしております。日本の青年海外協力隊も、昭和 45 年に発足し、平成 21 年度までに約 33000 名の隊員が派遣され、日本国内・国際的に高く評価されています。その中でも、高い専門性を持つ現職の先生方が派遣される現職教員派遣制度は、どの先進国にもない日本独自の制度です。この制度は平成 13 年度に制定され、平成 21 年度まで、約 400 名の現職教員の先生方が派遣されております。本報告会にご参加の方々は、アフリカ・太平洋諸国・中南米・南アジアと多彩な国で御活躍された先生方の活動、それを支える大学のサポート活動、帰国隊員の還元活動等を発表、それから講演を通して派遣現職教員制度の全体像を実感することとなると思います。現職教員派遣制度は、途上国の教員に限らず、その背景となる文化・社会・経済・言語といった環境を通して教育への理解・洞察のみならず、自己啓発につながる貴重な機会を現職教員の先生方に与えている、ということを確認しております。現職の先生方は、帰国後に国際交流会の講師をなさったり、学校学級で壁新聞を作成したり、途上国の衣装・食事などの展示会をしたり、また日本の児童と途上国の児童生徒との文通を始めたりと、さまざまに活動していらっしゃいます。そして国際的センスを持った人材活動に、日本の教育現場に還元なさっております。

今日、日本では内向きの子どもたちが増えているという中、先生方の活動が道を開くと確認しております。今後とも、できるだけ多くの現職の先生方がこの制度を利用して活躍し、日本と途上国のかけ橋、ひいては日本の子ども達・途上国の子ども達との懸け橋とな

ることを願っております。

短い挨拶ではございますが、以上をもちまして開会の挨拶とさせていただきます。